

アマダイ通信NO. 108

(Tile fish network letter)

2015年 金木犀芳しく

知人・友人各位

霞が関OBの先輩に誘われ、経済学部第一講義室で行われた「反安保東大人集会」に参加。政治集会に参加するのは？十年ぶりだ。前回選挙では敢えて争点にしなかった憲法違反の軍拡法案を臆面もなく国会に上程、世論を無視して強行採決するという、反民主主義。来年夏の参議院選までには国民の怒りも薄れてしまうとの、国民愚弄。次の選挙では大鉄槌を加えなければなるまいと思う。どこかの国と違って、比較的自由に政治的意見を表明できるのは結構だが、果たしてどうか？怒りは持続したいものだ。

◎二人の「カクさん」

越後湯沢の温泉宿稲本に久しぶり泊まる。取引先の設備工事会社が小水力発電事業をやりたいというので、●の「水商売」、電源開発（J パワー）の、民営化後の新規事業の一つ、井水利用専用水道事業のパートナーを誘い、新潟へ。苗場スキー場の更に上流のカグラにある電源開発の揚水発電所の工事責任者をした、水力発電とダム、「魚沼地方」のプロにお願い、越後湯沢の小水力発電事業予定地の山奥の砂防ダムの現場と現に動いている農業用水路を使った小水力発電所、大量の処理水を滝の様に信濃川に流し落とす長岡の下水処理場を案内して貰う。落差の大きい水流があつて、近くに送電線があれば、流れに発電機を設置するだけで、太陽光や風力と違い、季節や時間で多少の差はあつても24時間、年間を通じ安定した電力が得られる。太陽エネルギーが変身した水のエネルギーを、更に電気エネルギーに変換、有効利用。10億円で農業用水路に設置した発電機が毎年2億5千万円の収入をもたらす、経費は人件費とメンテナンスコストだけで、山奥の土地改良区の農家の皆さんに大きな潤いをもたらしているという。

道中、新幹線の停車する浦佐駅で休憩。見上げればかつての宰相田中角栄の大きな銅像。角さんと革さんの対面。同じく戦後の故郷の貧しさに涙しながら、変革を決意。かたや専門学校で土木工学を学んで土建会社を起し、国政へ。体制の中で、その闇も利用して巨利を得、コンピューターつきブルドーザーとか闇将軍とか呼ばれ、金の力で政治を動かし、政治で金をつくり、首相に上りつめる。道路を、新幹線を作り、消雪パイプを道路に埋め、農地にブルドーザーを入れ、蛇行する川を真っ直ぐにして三面をコンクリートで堅め、溪流にダムを造り、海岸線をテトラポットで埋め、農地を工場団地に変え、全国に港と空港を造り、日本を世界の工場へと発展させるのに功多く、毀誉褒貶する。最後、アメリカのトラの尾を踏み、権力闘争に負け、司直の手に落ちながらも故郷に銅像を残す。

かたや思いがけず「帝国大学」に入り、権力についてから世の中を変えればいいという賢い級友の声は歯牙にもかけず、体制に真っ向から挑み、無謀にもその転覆を試みた。通常は2年で進学する駒場の教養課程に7年在籍、その間デモで警察に逮捕されること7回、未決で中野刑務所に足かけ3年。命知らずの突撃も虚しく、若くして挫折。敢えて世を捨て、人生半ばでようやく社会復帰、右往左往。もう一人のカクさんを見上げる！

◎ギバサ

朝日新聞に、懐かしいギバサの記事。北海道から九州の沿海に生えるギバサ、地方によってはアカモクともナガモとも。学名はホンダワラ。春先に若芽を出して成長する。子供の頃、春休みにその柔らかい若芽を鎌で刈り取り、お袋からお小遣いを貰う。白神の雪が融けだす頃、まだ雪の残る浜辺で、竹竿の先に巻き付けた2本の柳の枝でからめ採ったアオサは、味噌汁のお椀の中でその若草色を際立たせ、食欲をそそる。アオサの次に旬が来る赤茶色のギバサも、湯がくとアオサより濃い緑、若布の芽株と同じ濃い緑に変わり、芽株と同じように粘る。三杯酢で酢の物にしたり、味噌で味をつけて酒の肴にすると美味しい。メカブと同じく刻んで出し汁と混ぜ合わせ、トロロご飯にするのもいい。

かつて、みのもんたの番組で高血圧にいいと放送されたら爆発的に売れたという。カルシウム、植物繊維、ポリフェノールなどが豊富で粘り気、シャキシャキ感があり、癖がなく他の食品と合わせやすい。最近ではサラダにも使われ、優れ物のギバサと芝海老と組合せた煎餅が作られたり、居酒屋のメニューにもなり、ヨーカドーなどのスーパーでも売られ、中部空港のレストランではアカモクきしめんを食べられるという。

メカブは夏休みに素潜りで採った。豊かな白神の海では夏、モズクや天草、布海苔も採れた。アイナメをヤスで突くのも面白い、サザエや鮑も面白いように採れた。大学受験に失敗、予備校に通うために上京するまで、夏休みは朝から日暮れまで、海に浸かって、狩猟・採集活動に忙しかった。海から上がっては浜辺に寝転がって甲羅干し、若鮎ならぬ[🐟]の塩焼きで、縄文人の血を引く少年は、夏の間、爬虫類や昆虫の様に2度、3度脱皮。

ギバサは自生で収量不安定なので、ワカメや鮑の様に、養殖の動きもあるという。お求めは故郷のかがもく海産(0185-78-2547)又は鈴木水産(0120-022-170)へ[📞]。

◎狩猟採集民!?

一時、冬場のスキーシーズンを除いて、毎週のように予約していたホームコースの小川カントリー。最近では隔週ペース。40人ほどの仲間にメール、毎回2組か3組で、コンペや賭けなど面倒なことはせず、ただ楽しくプレー。幹事の[🐟]は毎回参加するが、他のメンバーはそれぞれの都合でチョイスして参加、結局、毎回参加するのは幹事の[🐟]だけ。

毎週末、ゴルフのない日は近くの月島の区営プールと図書館をハシゴ、千m泳いだ後、経済誌や総合雑誌を読む。ゴルフもカートに乗らず歩き通すので、そこそこの運動量になるのだが、水泳には敵わない。プールまでは自転車で片道10分、千m泳ぐのに1時間もかからない。体力を使うので、1時間ほど昼寝する。池袋から小川町まで東武線快速で70分ほど、小川カントリーまでクラブバスで10分。車だと、銀座のランプで高速に入り、関越道の嵐山小川のインターから10分の小川カントリーまで、早くても1時間強、行楽シーズンには2時間以上かかることもある。帰りは1時間半から2時間半。一日丸々使ってしまう。運動としてみれば時間効率が悪い。小川カントリーは庶民的なゴルフ場で、春秋のハイシーズンでも、セルフプレーで食事含め、ビジターでも1万5千円ほど。夏冬は1万円強。ビジターを誘いやすい。[🐟]はメンバーなので、セルフプレーで、食事を含めて8千円もしないが、65才以上無料の区営プールにはコストパフォーマンスでは敵わない。おまけに交通費ゼロのプールに比べ、高速道路代が往復で5千円ほど、ガソリン代を入れるとプレーフィーをオーバーする。

週末、老人も効率よく体を鍛え、読書に勤しみ、情報をインプット、営業コンサルタントとして、人間●としての付加価値を高めるには、プールと自転車が断然パフォーマンスがいい。だが、春夏秋冬、それぞれの景色や草花を愛で、フカフカした芝を踏み、仲間とわいわいプレーしながら歩くのも楽しい。それに高速道路がいくら渋滞しても苦にならないので、ドライブも好きなようだ。たまには高速道路を思いっきり走ってみたい。仲間を募り、隔週毎に閑越道を走る。

下手なゴルフも数をこなせば上手くなる。130 だ、140 だと叩いていた昔に比べると多少は上達。ホームコースでは 100 台に定着、たまに 110 台や 100 を切る時もある。自ずとコースを外れたボールを探す機会も少なくなったが、仲間がボールを見失うと、真っ先に駆けつけて探す。コースを外れて飛んだボールにも居心地のいい所があるので、拾っても拾っても、次回行くと必ず拾ってくれるのを待っているロストボールがある。拾ったボールを打っている内はゴルフは上手にならないという仲間もいるが、貧乏性なのか？せつせと拾い続け、打ち込んだ数以上のロストボールが増殖する。コース外に打ち込んで OB になって、勿体ないからと探しに行くと、そこは宝の山！何故かアワビやサザエの穴場も同じ。昨日も一昨日も採り尽くした筈なのに、今日も同じようにサザエやアワビがいる。居心地が良いから新人が又、集まって来るのだろう。サザエやアワビの居心地は分かるとして、●は何故探す？大和に滅ぼされた狩猟採集の東北の原住民、アイヌの血を引くからか？そこに獲物がいると思うと、血が騒ぐ！（あなたも小川で狩猟採集しませんか？）

◎下流老人？！

最近下流老人という言葉をよく目にする。先日週刊東洋経済で下流老人特集を読み、本屋でその下敷きとなった？「年越しテント村」のメンバーで、聖学院大人間福祉学部の藤田孝典客員准教授、反貧困ネットワーク埼玉代表の書いた「下流老人」（朝日新書）も求める。他にも色々勉強してみる。年金がどんどん削られる中で、病気や失業、離婚、死別、長生き？！でストックも食い潰し、いとも簡単に貧困の底に沈む下流老人の現実には驚く。そしてまさに●自身が下流老人予備軍であることに気が付き、愕然とする。

健康を害し、明日から働けなくなったらどうなるか？慌てて預金通帳を見る。毎月の住宅関連支出としてマンションの管理費・修繕積立金等が 5 万 7 千 850 円（車を手放せば駐車場代 2 万 9 千円減）。80 歳までの住宅ローンの支払いが 15 万 2 千 515 円。年金が、自営業で 15 年掛けた国民年金と、サラリーマンで 10 年掛けた厚生年金を併せた分として、介護保険料を差し引いて隔月に 7 万 1 千 473 円が年金機構から、サラリーマン時代 10 年間掛けた厚生年金基金が隔月に 7 万 7 千 981 円、企業年金連合から振り込まれる。働いてフローの所得がある内はいいが、働けなくなったら途端に逆ザヤでアウトだ。40 年近く給食のオバサンをした栄養士の妻も年金を貰うが、二人分併せてもアウトだ。

幸い、5 年ほど前に半分キャッシュで買った 5 千 5 百万円の湾岸の大型高層マンション 85 m² が 1 千万円くらい値上がりして流通している。60 歳過ぎて、大枚のローンを組んでマンションを買い替えるという、随分リスクなことをしてしまったものだが、今さらやり直すことは出来ない。残念ながらリスクが現実になったら、今のマンションを売るか、買い替えるかしてダウンサイジング、値上がり分とローン返済済み分、キャッシュで払った分を現金化して食いつなぐしかない。長生きし過ぎたらと思うと、背筋が冷たくなる。

下流老人にならないためには！元気に働き続け、多少はストック、貯めたお金を安全に増やす方法も考えないといけないのか？幸い、働く、人の役に立つことは大好きだ。

本来喜ぶべき長寿が、長生きリスクとして不安の種になるという現実。医療、介護、年金の削減が叫ばれ、長生きリスクは増し、ストックを抱えたまま老人は不安におののき、お金を消費に回すことが出来ず、経済は委縮する。安倍政権の下でどんどんアメリカナイズが進むが、大陸ヨーロッパのように年寄も女も、働ける内は働き、稼ぎとストックに応じて原資を負担、誰もが最低限の人間らしい生活が出来る社会にできないものか？

◎戦争責任と植民地責任

図書館で久し振り「世界」を手にし、ドイツとロシアの現在する戦後補償問題の一文を読む。そういう意味では、日本は勿論、ドイツの戦争責任の問題も終わっていない。今、ドイツ目指し殺到する中東、アフリカの難民の問題も、ヨーロッパが植民地支配の責任を取って来なかったことの問題でもある。当然日本の植民地支配の責任も同じように問われる訳だが、戦後賠償の形で日本が道路や鉄道などインフラ整備に協力したことも手伝い、北朝鮮を除けば、東アジア、東南アジアはどうか経済の離陸に目処がつき、不十分ながらも食べていけるようになって、小康状態が続く。

アフリカや中東の多くは戦後もイギリス、フランスなどヨーロッパ戦勝国の植民地支配の下に置かれ、60年代からの植民地解放戦争で独立を勝ち取ったが、日本の戦後賠償の様に、宗主国の責任を問い、賠償を経済発展の基礎とすることまでは出来なかった。いびつな支配構造をそのままに、ただ放り出されたことによる長い経済的な停滞と混乱が、難民発生の原因であることからすれば、ヨーロッパは今、その責任を問われているともいえる。

ドイツは最初トルコからの移民を受け入れ、文化、社会の葛藤を経ながらも、労働力不足を補い、経済を浮揚。次いで東ドイツを併合。更に東欧からの移民を引き受け、経済を発展させて来た。歴史的、人道的な立場からの受け入れで、今回も当座、混乱と軋轢、巨額の費用を伴いながらも、新たな労働力を獲得することで、国力の増強に繋げて行くのではないか？翻って少子高齢化、労働力不足を叫ばれる日本はどうすればいいのか？

◎どこが一番面白かったですか？・・・キューバツアーの薦め

半世紀をへて、アメリカとキューバがめでたく国交回復。「一国社会主義」は不可能だということが、又、明らかになった。アメリカは「社会主義」キューバはけしからんというが、腐敗したバチスタ独裁政権を最後まで支持、経済封鎖と反革命干渉で、29歳の青年弁護士、自由主義者カストロを「社会主義」陣営に追いやったのはアメリカだ。

アメリカ主導で外資が導入され、経済成長が進むと、全体的にパイが増えると同時に、格差も広がるのか？現在の、教育と医療は無料で、並べて貧しいが故に、子育ても介護も家族で、隣人同士で助け合い、物乞いも殆ど見かけず、電力不足で夜も暗いが治安もよく、平和で、陽気に、歌い、踊って楽しく暮らしている。「オールディズ三丁目の夕陽」の時代を彷彿とさせるような「貧しいが豊かな」社会は変わるのか？豊かになっても、平和で仲良く、陽気で楽しいキューバのままですべて欲しい！

急にキューバツアーの案内が目につくようになった気がするが、一度行かれてみては如何でしょう？☘️さんはよく海外に行きますが、どこが一番良かったですか？と聞かれる。

関心の在り様で面白さも違うので一様に言えないが、自然の景色では中国の九寨溝、都市の景観ではクロアチアのドブロブニク、そしてなんとと言っても、「並べて貧しいが、豊かに暮らす」キューバが一番と答える。🍀も数年後にはキューバを再訪したいものだ。

🍀アマダイのミャンマー紀行Ⅲ（2014年8月15日～、クラブツーリズム「全

日空直行便で行く！気軽にミャンマー黄金の仏教国4日間」

⑤首長族

現世の糧の市場を見学した後は来世の為の糧の寺院の見学。遙々群馬から海を渡って、日本の1.8倍も面積のあるミャンマーの、しかも真ん中辺にあるパガンまでとことこ走って来たエンジンで走る馬車、いずみ号に案内して貰う。金色の円形ドームと尖塔を持ち、65mとパガン一高いタビニュー寺院は信心深い仏教徒のミャンマー人で溢れ、バカンスの期間だから白い肌の異教徒も多い。遠い異郷で長いバカンスを楽しむ白肌族。近隣国を2泊4日の駆け足ツアーの黄肌族。豊かになったとはいっても、豊かさの質とストックの差を感じる。向いのタビニュー僧院には日本人戦没者の慰霊碑があり、僧侶が手厚く維持・管理してくれている。ウラジオストックとウランバートルでも、日本人戦没者慰霊碑や墓地で祈りを捧げた。何故無辜の民が、遙か遠く、異郷で命を落とさなければいけなかったのか？ドル札ではなく、千円札をお布施とする。

どの寺院も同じ造りだが、東西南北に入口があり、その奥に大きな金色の大仏が鎮座し、4体の大仏を回廊がつなぐ。回廊の所々にも、寄進された大小の仏像が安置され、来世の幸せを約束するかのようには黄金のオーラを発しているようだが、神の存在を信ぜず、神は人間が創ったものだと嘯く不敬の輩🍀に、そのオーラは見えず、ご利益も及ばない。己のここまでの不遇はそのせいかと反省しても今更、遅い。入口と大仏の間の通路の両側には花屋や土産物屋が店を構え、結構繁盛しているのは金色のオーラが見える人が多いのか？現世の不遇を来世で取り返したい人が多いからか？中には仏像の金色を更に上塗りして、そのオーラを増そうとする信仰心の篤い人に、5センチ角くらいの金箔を3百円くらいで売るオバサンが結構いる。ペタペタ金箔を貼られて、ニキビを潰し過ぎたゴジラ松井どころか、原形がわからないくらいに凸凹の形相になった仏様はご利益が多いのだろうか？これは美味しいんですよとガイドのチョーさんに薦められ、橙色のきれいな花を咲かせ、大きなサヤに入った豆を実らせる豆科の高木、タマリンドの豆で作ったお菓子をお土産に買う。薄い砂糖浸け3、4枚を柔らかい紙で包んだ、美白効果があり、パウダーで日本にも輸入されているという、タマリンドの実のお菓子でパンパンになった袋が1ドル。

次の寺院を出た所に砂絵を制作、販売する露店商。紙に糊で細かい砂を貼り付け、その上に筆で器用に絵を描いていく。その隣にいざり機で布を織る婆さんと若い娘。2人の首には首輪が金色に輝き、ろくろ首のように長い。首長族との初対面だ。しわくちゃんのお婆ちゃんがろくろ首を回してニコニコ愛嬌を振り撒き、孫娘がのんびりと機を動かし、息子が熱心に布を売る。首輪はワンタッチで下段が外れて重なるようになっていて、夜は首輪を短くして寝るといふ。秘め事の時、首輪も男女のリズムに合わせ、カチャカチャ刺激音を発し、雰囲気盛り上げるのだろうか？

お昼は飲茶。美味しく頂く。中華料理と変わりなし。河岸段丘の上段から遙か見遣ると、

ゆったりとイラワジの大河が身をくねらせ、対岸の段丘の、森の緑を突き抜けて、パゴダのドームと尖塔が、金色に輝く。大河とレストランの境界を画すかのように、大きな瀬戸物の甕が点々と置かれている。体が丁度丸ごと入りそう。波間に漂う蛸が蛸壺に誘われて入るように、何故か●は空中を漂うように甕に近づき、蛸のように甕に身をくゆらせ入る。いい湯だな！と暢気に体を回すと我が身の入る甕の下は断崖。ぐらりと数十 m 転げ落ちたら、そのまま大河イラワジをドンブラコ、桃太郎ならぬピンクレイ爺と言われ、そのまま甕棺葬となるは必定。高所恐怖症の●はホウホウの体で甕棺を這い出る。世界遺産にもなるかという世界的観光スポットで、●が国際的好奇の視線を浴びたというのに、一行の中の母子連れの母親が、レストランの入口の甕棺？に入り記念撮影。男女を問わず団塊世代のジャポンはクレージー！

パガンは漆器が特産だと、漆器工房へも寄る。漆器というと、故郷能代の春慶塗りは秋田名物で、秋田音頭にも吟われ、一子相伝、能代高校同級生の石岡春慶君が技術を伝承していた。色白の柔肌、少年●は野山を走り回っていても、あれが漆の木だと意識しただけで、体がむず痒くなった。漆の妖気が漂っている筈の工房に入るのに、多少身構えたが、何の刺激もないのは面の皮が厚くなったか？単純な加齢で柔肌が角質化したか？木地師が轆轤などを使って大小の木の器を作り、職人が手と足を器用に操り竹を割いてヒゴを作り、ヒゴを段々に組み上げてお椀などを作る。細い竹ヒゴと馬のしっぽを組み合わせた軟らかな木地の器もある。それらに何重にも漆を塗り、絵付けをして、花瓶やら、お椀やら、杯やらが完成する。ホホウと一通り感嘆の声を上げたあと、売り場に案内される。ここでも雌牛 COW は本領発揮。お土産やら、自家消費やらで沢山買う。吊られて●も 1 個 8 ドルという楊枝入れを、フェアトレードじゃないなとか思いながら、6 ドルに値切って買う。日本に帰ってよく見ると、蓋はうまく噛み合わないし、底が丸く膨れていささか安定を欠く。高校同級生の石岡君の春慶塗りにには及ぶべくもないと、がっかり。反面、安心もする。沢山買った COW 達はどうだったのだろうか？

⑥パガンで日本の農村を憶い出し

群れいる「馬」の中から、第二の奉公に、遙々馳せ参じた中古バスいずみ号。異国の雨季の濡いた大地に土埃を上げ、故国の客を乗せ駆け回る。午後も荒野に無数に林立するパゴダを 2、3 見学する。宗教に関心のない無神論者には細部の違いがわからず。夕暮れ時、ひととき高いシュエサンドー・パゴダに、異国の平原に落ちる夕陽を見ようと、登る。かなりの急角度だ。時に両脇の手摺に掴まりながら登る。カンボジアのアンコールワットやインドネシアのポロブドウル、メキシコのピラミッドに登った時もこんな感じだったと冷や汗をかきながら登る。鈴成りの見学者の顔の色と飛び交う言葉は千差万別。沿海のヤンゴンから大分内陸に入ったパガンというのに標高は百 m あるかないか。広い平原を野焼きのように燃やし、種火が沈めば、黒く燃え尽きた平原に、残り火のように満天の星が輝く筈が、厚い雲に阻まれ種火は淡く狭く雲間を朱に染めるだけ。

パガンでの夕食は伝統芸能の操り人形劇を見ながら野外でインドと中国の間、カレーと油炒めの中間というか、ごちゃ混ぜ、辛味は唐辛子をお好みで添加の、中庸の味のミャンマー料理。二種類の白身魚のフライは市場で見た大鯰と鯉の仲間か？美味しい。牛肉や羊の肉も出るが硬い。特に牛肉が硬い。犁を引いて畑を耕していた働き者の牛が、いよいよ

働けなくなって、ご主人様への最後のご奉公で、肉屋に駆け込んだからか？

戦争直後の日本がまだ貧しくて、物資が乏しく、我が家でもセーターや服を自給するために綿羊を、乳を採るために山羊を飼い、物好きな親父は郵便局長の仕事の傍ら、乳牛まで飼っていた。家畜を世話するのは子供達。餌を食べさせ、敷き藁を替え、乳を搾り、煮沸、瓶詰めして村中に配る。登校前に国鉄五能線の土手の木に山羊を繋ぎ、秋には山の草苅場で一家総出で草苅。稼げなくなると、冬肥溜めの雪の上で食肉に化けて、最後のご奉公。人間の口に入らぬ物は肥溜めで微生物に分解されて肥料になり、野菜に化けてから、時間差で人の役に立つ。敗戦直後の東北の寒村のように、貧しくものどかな、半ば物々交換の経済が行われているのかも知れない。

ミャンマーの街では犬や猫が幅をきかせている。朝の市場でも数頭の犬が、喧嘩して凄いい勢いで走り回っていた。朝パゴダの見学の途中のトイレ休憩でも使わせて貰った操り人形劇のレストランも、猫が我が物顔に歩き回っている。足元でまとわりつく猫に残飯をやる。雨季だというのに野外で食事するのは、パガンはよほど雨が少ないのだ！

◎「安全に空を飛ぶために！」・・・東大三鷹クラブ第122回定例懇談会のご案内

9月の三鷹クラブ定例会は、講師として佐久間秀武さん（昭和40年入寮、㈱ヒューファクソリューションズ代表取締役）をお迎えしました。

佐久間さんは、昭和44年に工学部航空学科を卒業、46年に同大学院修士課程を修了された後にJALに入社されました。その後、運航本部、整備本部、技術総本部技術研究所、本社総合安全推進室と、一貫して航空機の技術と安全管理の道を歩まれました。その間、国内では日本航空宇宙学会飛行力学部門の委員、日本人間工学会航空人間工学部会の委員、国際宇宙ステーション「きぼう」独立評価委員会の委員、国際的には国連・国際民間航空機関（ICAO）のヒューマンファクター研究アドバイザー、米国航空輸送協会（ATA）のタスクフォースメンバーなどと、社外活動でも活躍されました。

とりわけ、平成10年には、オーストラリア航空心理学会が主催した第4回国際シンポジウムに招かれて、「ヒューマンファクターの理論を応用した事故防止戦略」と題する、世界でも最先端の事故防止手法を発表されています。平成18年にJALを退職された後には、現在の会社を設立され、JALにおける経験と知見を社会に還元すべく、精力的に活動されています。最近では、ボーイング787のリチウムイオン電池発火問題や調布空港における小型機事故についても、テレビや新聞、雑誌で専門家としてコメントされています。

今回の講演では、航空機の技術や安全に永く係られた佐久間さんに、「民間航空機の発達と安全課題」と題して、現代のハイテク航空機が抱えるさまざまな安全課題についてわかりやすく解説していただこうと考えています。なお、講演後の質疑応答と二次会の場では、航空機に関する全般的な質問にも応えていただけるそうです。（干場 記）

日 時：平成27年9月30日（水） 18時30分～21時（18時開場）

場 所：学生会館本館302号室（千代田区神田錦町3-28 TEL 03-3292-5931）

会 費：5000円（会場費、夕食代・飲み物代、通信費など込み）

申込先：平賀・干場 FAX 03-5689-8192 TEL 03-5689-8182

（有）ティエフネットワーク Email: tfn-hoshiba@blue.ocn.ne.jp

二次会：別途 近くの中国料理店 SANKOUEN で行います。（講師参加予定）

◎味は文化です！「無門」の本格和食と歌舞伎町探訪

久しぶり、「味は文化です！」と銘打って、歌舞伎町の居酒屋「無門」の本格和食と歌舞伎町探訪に、留学生、院生 11 名を招待、年寄 2 名でおもてなし。7 時から 150 分の飲み放題付き。残念ながら無門も閉店。味は文化です！ささやかだが、盛り込みサラダ、蒸し物、揚げ物、厳選豚しゃぶ、しゃきしゃきレタス、♫の沖縄そばの、ファミレスやファーストフードとは一味違う、本格的和食を留学生に手軽に味わって貰えるのもこれが最後。今回は、近くと同じ永和グループの「いけす」で開催ということになるのか？最近外人観光客に人気の歌舞伎町のど真ん中にあるので、「世界の歓楽街」の探訪にもなる。皆無事にたどり着けるか心配するが、歌舞伎町のプロ!?が道案内するまでもなし。参加者は、北條 新之介 (2015[院]・総合文化研究科[地域文化研究専攻アジア科中国]・真岡[東北大学])、長濱 章仁 (2015[院]・先端科学技術研究センター・明星[京都大学])、鄧 雷 [Denglei] (2014・北京大学)、Alex Chamber (2014・テネシー州)、田中 翔 (2011[院])、崔 正行 (2013・理 I・瀋陽)、Martina Diego (2011・ローマ)、石田 翔太郎 (2010・尾道北)、伊藤 拓也[楊 楊] (2010・清教学園)、黄 越[Luna] (北京大学) 田村 和也 (2011→2015[院]・理 I→総合文化・新潟)、辰 紘 (1965・文 I→教養学科・三国丘)

◎切手大の北京ダック・・・本郷中華料理屋での納涼・交流会 (2015.08.01)

歌舞伎町の無門が残念ながら閉店、土曜日夕方 5 時から、本郷の中華料理屋での暑気払い交流会。現役 10 名、宿舎になってからの若い OB3 名、年寄り 7 名で、65 才の年齢差を越えて楽しく交流。全員に切手大!の北京ダック付き。飲み食べ放題 2 時間のところ、8 時まで盛り上り、事務所ですらに二次会。OB は 3 千円会費のところ、2 倍、3 倍の寄付もあって、今回は🍷の持ち出し少し。参加者は、張 楚杰 (2015・香港)、岸名 遼平 (2015・理 I・北海道・岩見沢東)、藤後 順己 (2015・理 I・兵庫・甲陽学園)、福永 晋朔 (2015・文 II・福岡・小倉)、毛利 源 (2015・理 I・福岡・明善)、杉浦 ちなみ (2012 (院)・教育学研究科・岐阜・可児→名古屋大)、加藤 裕太 (2015 (院)・理学系研究科 天文学専攻 D1・神奈川・横須賀→北海道大)、北條 新之介 (2015 (院)・総合文化研究科 地域文化研究専攻 アジア科 中国・栃木・真岡高校→東北大)、江川 伊織 (2011→2015 (院)・総合文化研究科・山形・酒田東)、岡島 未来 (2011→2015 (院)・総合文化研究科 広域科学専攻 生命環境科学系・京都・堀川)、今岡 奏帆 (2010・文 I→2014 (院)・総合文化研究科国際関係論分野・静岡・富士) マルティナー・ディエゴ (2011・教養・イタリア・ローマ大学)、宮本 洋之 (2008・法・京都・洛南) 松澤 早希 (2008・教養→総合文化・茨城・土浦第一) 井上 豊 (1968・文 I・愛媛・愛光)、勝部 日出男 (1968・文 I・鳥取・米子東)、飯田 徳松 (1966・農・東京・上野)、桜井 尚武 (1965・理 II→(院)・農・群馬・高崎)、渡辺 俊介 (1965・文 III・福岡・修猷館)、平賀 俊行 (1951・文 I・北海道・稚内)、渡辺 巖 (1951・理 II→(院)・化学・愛知・半田)

◎最後に

本号執筆の最中、茨城、栃木、宮城中心に水害。何でもありの災害列島、戦後直ぐの頃の台風被害に比べれば軽微になったが、人間も又、自然の一部であると改めて痛感。(再見)